



〔監修〕

小松左京／紀田順一郎

野十二全集



三一書房

海野十三全集

第10巻 宇宙戦隊 (第12回配本)

1991年5月31日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者	小松左京
発行者	紀田順一郎
印刷所	畠山滋
製本所	日本写真印刷(株)
	東京美術紙工

発行所

株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3
電話 03(3812) 3131~5 番
振替 東京 9-84160 番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-380-91539-5

© 1991年

宇宙戰隊・目次

のろのろ砲弾の驚異ほうだん きようい — 金博士シリーズ・1 — 7

人造人間戦車の機密じんぞうにんげんせんしや きみつ — 金博士シリーズ・2 — 19

独本土上陸作戦どくほんど じようりくさくせん — 金博士シリーズ・3 — 31

今昔ばなし抱合兵团こんじやく サンドイッチヘいだん — 金博士シリーズ・4 — 43

毒瓦斯発明官どくガス はつめいかん — 金博士シリーズ・5 — 57

戦時旅行鞆せんじりょこうかばん — 金博士シリーズ・6 — 69

大使館の始末機関たいしかん しまつきかん — 金博士シリーズ・7 — 83

時限爆弾奇譚じげんばくだん きだん — 金博士シリーズ・8 — 97

地軸作戦ちじく — 金博士シリーズ・9 — 109

不沈軍艦の見本ふちんぐんかん — 金博士シリーズ・10 — 121

共 軌回軌彈 きようやくかいてんだん

—— 金博士シリーズ・11

137

栗水兵戦記 くりすいへいせんき (抄)

151

宇宙尖兵 うちゅうせんべい

175

火山島要塞 かざんとうようさい (抄)

215

宇宙戦隊

353

謀報中継局 ちようほうちゅうけいきよく

439

英本土上陸戦の前夜 えいほんどじようりくせんぜんや

463

沈没男 ちんぼつおとこ

507

もくねじ

513

解題〔瀬名堯彦〕

523

宇宙戰隊——海野十三全集・第10卷——

のろのろ砲弾ほうだんの驚異きょうい

—金博士きんシリーズ・1—

今私は、一人の客人を伴って、この上海で有名な風変わりな学者、金博士の許へ、案内していくところである。

博士の住居が、どこにあるか、知っている人は、ほんの僅かである。人はよく、博士が南京路の雑闇の中を、擦れ切った紫紺色の繻子の服に身体を包み、ひどい猫脊を一層丸くして歩いているのを見かけるが、博士の住居を知っている者は、殆んどない。

金博士の住居は、南京路でも一等値段がやすく、そして一等繁昌はんじやうしている馬環ばかんという下等な膳飯屋いせんめやの地下にあるのだ。

「さあ、ここがその馬環です。どうです、たいへんな繁昌はんじやうでしょうが」と私は、客人をふりかえった。「足の踏み入れようもないというのが正にこの店のことだが、第一このむいんとする異様な匂いには、慣れないものは大閉口だいけいこうで、とたんにむかむかしてくる。だが、とにかくこの中へ入っていかねば、博士に会えないのだから、一時鼻をつまんで、息をしないようにして、私についていら

っしやい。邪魔になるお客さんは、遠慮なく突きとばしてよろしいのである。お客さんは、突きとばされて井どまりの中に顔を突つ込こもうと、誰も怒るものはいないであらう。遠慮していれば、いつまでたつても、奥へ通れない。さあ遠慮なく、こうして突きとばすな。しかし懐中物かいちゆうぶつだけは要慎ようじんしたがいいですぞ。突きとばされるのを予め待っていて、突きとばされると、とたんにこっちの懐中物を失敬する油断ゆだんのならぬ客がいるからね。あれつ、もうやられたつて。ああ待った。もうさわいでも駄目です。一度やられると、たとえやった犯人の顔がわかつていても、二度とお宝たからは出て来ないのです。さわぎたてると、どうせろくなことにはならない。また何か盗ぬすられます。生命いのちなどは、盗ぬすられたくないでしょうから。

さあ、ようやく奥へ来ました。ここには小房しょうぼうが、いくつか並んでいる。こつちへ来てください。ここへ入りましょう。はいったら入口のカーテンを引きます。さあ、椅子に腰をおかけなさい。そして、両手でこの大きな田卓まるたいふく子を、しっかりと抑おさえてください。しっかりとつかまっていなさい、あとで舌を噛かんだり、ひっくりかえって腰をうったりしますよ。はい、今うごきます。秘密ひみつの鈕ボタンを今押しましたから。それ床もろとも、下りおりましたでしょう。しっかりと卓子につかまっていなさいとい

ったのは、ここなんだ。そうです、この小室全体が、エレベーター仕掛になつてゐるのです。床も天井も壁も、一緒に落ちていくのです。もう今はたいへんなスピードで落ちていますよ。なにしろ、これがエレベーターなら、地階三十階ぐらゐに相当する下まで下りるので、なにしろ、地面から測つて、二百メートルもあるそうですからね。

爆撃をさけるためですかつて。もちろんそれもありましたが、もう一つの理由は、金博士は宇宙線を極度に避けて生活してゐられるのです。あの宇宙線なるものは、二六時中、どんな人間の身体でも、刺し貫いてゐるので……」

話の途中に、エレベーターは停つた。

私は客人の手をとつて、エレベーターを出ると、しばらくは真の闇の中の通路を、手さぐりで歩いていった。

二百メートルばかり歩いたところで、通路は行き止りとなる。そこで私は、今切り取つたばかりのような土の壁を、とんとんと叩いた。すると、ぎいといと音がして、私たちは眩しい光の中に、放り出された。

そういう段取になれば、私は間違なく、闇の迷路をうまく選り通つてきたことになるのである。下手をやれば、いつまでたつても、この光の壁にぶつからないで、しまいには、進むことも戻ることすらならず、腹が減つ

て、頭がふらふらになる。

私は、はげしい目まいをおさえて、しばらく強い光の中に、うつ伏してゐた。土竜ならずとも、この光線浴には参る。これも博士の警戒手段の一つである。

私は、ようやく光になれて、顔をあげることが出来た。

「やあ金博士。とつぜんでしたが、ロッセ氏を案内して、お邪魔に参りました」

「ほう、その人は、英国人じゃないだろうな。英国人なら、ここには無用だから、さつさと帰つてもらおう」

と、金博士は、大きなウルトラマリン色の眼鏡を手に、おさえながら、椅子のうえから立ち上つたのであった。

2

博士は、大の英国嫌いである。英国人と酒とは、大嫌いであった。

「ああ博士。ロッセ氏は日本人です」

「本当か、綿貫君。氏は、日本人にしては色が黒すぎるではないか」

綿貫とは、私の名前だ。

「氏は、帰化日本人です。その前は、印度に籍がありました」

「どうぞよろしく」

ロッセ氏は、流暢な日本語で、金博士にいんぎんな挨拶をした。

博士は、無言のまま肯いて、私たちに椅子を指すと、自分は再び椅子に腰をおろした。私たちの囲んだ机の上には、何をやっているのか分らないが、夥しい紙片が散らばっていた。そして紙片の上には、むずかしい数字の式が、まるで蟻の行列のように、丹念に書き込んであった。

「きょうお連れしたロッセ氏は、電気砲学の權威です」

と、私は紹介の勞をとって、「ロッセ氏は、三ヶ月程前に、初速が一万メートルを出す電気砲の設計を完成されたのですが、残念にも、今日日本では、それを引受けて作ってくれるところがないために、すっかりさってしまわれたんです。それでこの上海へ、憂鬱な胸を抱いて、なにか気分をほぐすものはないかと、遊びに来られたのですが、私は、博士を御紹介するのがよいと思ったので、実は、ロッセ氏には事前に何にも申さないで、とつぜんここへお連れしたわけですから、どうぞ話相手になつてあげていただきたい」

「私が思いがけなくすっかり底を割ってしまったので、ロッセ氏は、私の話の途中、いくたびも仰天して、私の袖をひいて、話をやめさせようとしたほどであった。博士は、かるくうなずいていたが、私の話を聞き終ると、

「それは、くさるのも無理ではない」

と、同情の言葉を洩らし、

「わしは、あなたがロッセ氏であることは、今綿貫君の紹介で初めて知ったわけだが、しかしあなたのことは、電気砲の論文を読んで、前から知っていたよ」

と、たいへんいい機嫌の様子で、立ち上つてロッセ氏の黒い手を握つた。

ロッセ氏の面上には、いたく感激の色が現れた。

「だが、ロッセ君。そんなに初速の早い電気砲をこしらえて、どうするつもりなんかね」

「これはしたり、そのような御たずねでは恐れ入ります。初速の大きいことは、すなわち射程が長いことである。しからば、われは敵の砲兵陣地乃至は軍艦の射程外にあつて、敵を砲撃することが出来るのです。こんなことは常識だと思ひますが……」

と、ロッセ氏は、羞らいながら応えた。金博士からメンタルテストをされたように感じたからであろう。

「そういう考えじゃから、命中率はだんだん低下し、砲

弾代などが、やたらにかかるのじゃ。射程には、自らの限度がある。ただ砲弾を遠方へ飛ばすだけなら、射程をいくらかでも伸ばし得られるが、砲門附近の風速と、彈着地点附近の風速とを考えてみても、かなりちがうのである。射程長ければ、命中率わるしである。そうではないか」

金博士は、鉛筆を握って、紙のうえに、しきりに彈道曲線を描きつつ喋る。

「ですが、金博士。僕はぜひともいい大砲を作りたいと思つて、そのような初速の大きい電気砲を設計したので、一発撃つてみて、命中しなければ、二発目、三発目と、修整を加えていきます。十発のうち、二発でも一発でも命中すれば、しめたものです」

「そういう公算的射撃作戦は、どうも感心できないねえ。なぜ、そんなに焦せるのであるか。もつと落着いて、命中しやすい方針をとつてはどうか。ロッセ君、あなたの話を聞いていると、聞いているわしまで、なんだかいらいらしてくる。それでは、戦闘に勝てない。ロッセ君、あなたは日本人だといふけれども、あなたの電気砲設計の方針は、日本人的ではないですぞ。それとも、近代の日本人は、そんなにいらいらして来たのかな」

色眼鏡の底に、金博士の眼が光る。

ロッセ氏は、次第に沈痛な表情に移つていつて、しき

りに唇を噛んでいる。私は、それを取りなそうにも、いふべき言葉を知らなかつた。——ロッセ氏が、或る秘め事を、ここで告白するのでなければ、どうにもならないのであつた。

しばらく、息づまるような沈黙が、金博士の書齋に続いたが、やがて博士は、やおら椅子から立ち上つて、室内をこつこつと歩きだした。

「ねえ、ロッセ君」

「はあ」

「わしは君に、一つのヒントを与える。砲弾の速度を、うんと低下させたら、どんなことになるか」

「射程が短縮されます。技術の退歩です。ナンセンスです」

「いや、わしのいつているのは、射程は、うんと長くとするのだ。ただ砲弾の速度を、極めて遅くするのだ。そして命中率を、百パーセントに上げることが出来る。それについて、一つ考えてみたまえ。解答が出来たら、また訪ねてきなさい、わしは相談に乗ろうから」

「砲弾の速度を下げるのは、ナンセンスですが……とにかく折角のおすすめですから、一つ考えて来ましょう」

「そうだ。そうしたまえ。それが、うまくいくようなら、あなたの企図している英国艦隊一挙撃滅戦も、うまくいくだろう」

「えつ、なんですつて」

「いや、あなたの懐中から掏った財布をお返しするよ。これは上から届けて来たものだが、いくら暗号で書いてあるにしても、英艦隊撃滅作戦の書類を中に挟んでおくなんて、不注意にも、程がある」

3

外へ出ると、ロッセ氏は、大昂奮の面持で、私を捕えて、放そうとはしなかった。

「ねえ、綿貫君。われわれは、もつと語ろうではないか。素敵なブランデーをのませる家を知っているから、これからそこへ案内しよう」

私は、初めから覚悟をしていたので、ロッセ氏のがまに、ついていった。

ホテル・クナンの、しずかな酒場の片隅に、ロッセ氏は、私を連れていった。

「この卓子は、僕の特約の席なんだ。では、お互いの健康を祝して……」

と、ロッセ氏は、琥珀色の液体の入ったグラスを高くさしあげて、唇へ持っていた。

「ふう、これでやつと落ち着いた。金博士も、ひどいところを素破ぬいて、悦んでいるんだねえ。宿敵艦隊の一件が、あそこで曝露するとは、思っていなかった」

「まあいいよ。私も、すこし独断だったけれど、あなたを早く、博士に紹介しておいた方がいいと思ったもんだから、黙って連れていったんだ」

「ああ、金博士は、驚異に値する人物だ。一体あの人、中国人かね、それとも日本人かね」

「そのことだよ」

と、私は、グラスの酒を、きゅうとのみ乾して、

「一体、金という名前は、中国にもあるし、日本人にもある。それから朝鮮にもあるんだ。もちろん満洲にもあることは、君も知っているだろう。ところで博士は、その中の、どこの人間だか知らないといっている。博士は捨児だったんだ。たしかに東洋人にはちがいないが、両親がわからないから、日本人だか中国人だか分らないといっている」

「赤ちゃんのときは、何語を話していたのかね」

「それは広東語だ。もつとも、博士がまだ片言もいえないときに、広東人の金氏が拾い上げて、博士を育てたんだからねえ、赤ちゃんのときに広東語を喋ったのは、あたり前だ」

「ふしぎな人物だ。そして、あの穴倉の中でなにをして

いるのかね」

「博士は、科学者だ。いや、もつと説明語を入れると、国籍のない科学者だ。国籍のない人といっても、ユダヤ系というわけではない。博士は曰く、わしは国籍こそ無ければ、あくまで東洋人だといっている」

「で、博士は一体、毎日どんなことをやっているのか」

「博士は、なんでも、気に入った科学をとりあげて、どんどん研究を進めている。今は、宇宙線と重力との関係を研究しているが、今までにも、たくさんさんの発明がある。その中で、かなり古臭くなつた発明を、方々の国に売って、莫大な金を得ている。博士の資産は、何百億円だけ見当がつかない。が、それよりも驚異に値するのは、博士の自主的研究は独得なる発展を遂げ、今世界中で一等科学の進んだアメリカや、次位のドイツなどに較べると、少くとも四五十年先に進んでいると、或る学者が高く評価している。だから、博士は、科学に関して、世界の人間宝庫であるともいわれている」

私が最大級の讃辞を博士に捧げていると、ロッセ氏は、そうかそうかと、ペルシャ猫のように澄んだ瞳をくるくるうごかして、しきりに感服の面持だった。

「だから、博士がうんといえ、あなたの設計した電気砲も、博士の秘密工場の手で実際に作つてくれるだろう。そうすれば、あなたの念願している英艦隊の撃滅の

ことも——」

「いや、博士は、初速の速い電気砲が気に入らないらしい。むしろ、速度の遅い、そして射程の長い砲弾を考え出せといわれたが、僕には、何のことだか分らないのだ。なぜなら、速度を遅くすることと、射程を長く伸ばすこととは、互いに相傷つける条件なんだからねえ」

「うむ、まるで謎々だね」

「そうだ、謎々だ。それも解答のない謎々を出題されたような気がする。博士は、ひよっとしたら、僕をからかつたのかもしれない」

「そんなことはないよ。博士は、からかうなんて、そんな人のわるいことはしない。ああまで真剣で、大真面目なんだ。謎々をかけたにしても、博士は必ずその解答のあることを確めてあるのだと思う」

「そうかなあ。速度の遅くて、射程の長い、そして命中率百パーセントの砲弾！ そんなおそろしいものが、この世の中にあるとは、どうしても思われないが……いや、僕たちは、既成科学に対し、すっかり囚人になっているのがいけないのかもしれない」

ロッセ氏は、そういつて、ぶるぶると身顫いをする。と、急いでグラスを唇のところへ持つていった。

私たちが外に出たときは、夜もだいぶん更けて、さすがの南京路も、人影が疎らであった。

二人は、アルコールにほてった頬を夜風に当てながら、別に当てもなく、路のあるままに、ぶらぶら歩いていった。私たちの話題は、やはり金博士と、そして博士よりロッセ氏に与えられた奇怪なる謎々とに執着していた。

それはもう、四五丁も歩いた揚句のことだったと思うが、ロッセ氏は、急に両の手を頭の上にのべし、拳固をこしらえて、まるで夜空に挑みかかるような恰好で、はげしく振り廻しはじめた。たいへん昂奮の様子である。

「おい、ロッセ君。一体、どうしたのか」

「うん。やつぱり、われわれは、金博士に騙されたんだ。あんなばかばかしいことが出来てたまるものか。砲弾が低速で走れば、たちまち落ちるばかりではないか。高速であればこそ、遠いところへも届く」

「それはそうだね」

「あの金博士の意地悪め。僕は、英艦隊を一举にして撃

沈したため、うまうまと博士の見え透いた悪戯に乗せられてしまったんだ。ちくしょう、ひどいことをしやる」

「……」

ロッセ氏は、天に向って、しきりに博士の名を呪いながら、停っては歩き、そして又停っては歩きた。よほど口惜しそうだつた。

私は、博士のことを、そんな人物だとは思わないが、ロッセ氏から、のろの砲弾についての討論を聞いているうちに、だんだんと氏のいうところも尤だ思うようになった。

「なるほど、反対条件だねえ」

「博士よ、豚に喰われて死んでしまえ」

「まあ、そういうな。背後をふりかえってから、ものをいつて貰おうかい」

ふしぎな声が、とつぜん、私たちのうしろから聞えたので、私ははっと思った。

「誰だ？」

「あつ！」

生れてからこの方、私はこんなに愕いたことは初めてだった。悲鳴をあげると共に、私は愕きのあまり、舗道のうえに、腰をぬかしてしまった。なぜと云って、私が振り返ったとき、そこには声をかけた筈の誰もいなか